

## 2023年度 看護系学会等社会保険連合研究助成 研究報告要旨

※1000字程度

【タイトル】全国訪問看護ステーションにおける看護師が実施する摘便と浣腸を含む排便ケアの実態調査

【研究者名】栗田愛, 吉田みつ子, 香春知永, 吉井紀子, 大久保暢子

### 1. 目的

訪問看護ステーション（以下、VNS）の排便ケアの実態を明らかにし、診療報酬改定申請の根拠となるデータを得ることを目的とした。

### 2. 方法

対象は全国から無作為抽出した2,537施設のVNSとし、2023年7～10月に無記名式質問紙調査を実施した。調査項目は、回答時点での訪問看護利用者数の内訳とグリセリン浣腸（以下、GE）副反応の発生状況、GEや摘便を実施する利用者個々の訪問看護と排便ケア内容とした。解析ソフトIMB SPSS Statistics 25を用い、記述統計により集計した。研究は人間環境大学研究倫理審査委員会の承認を得てから実施した（承認番号：2023N-005）。

### 3. 結果

305施設のVNSが回答した。利用者総数は24,704名であり、排便ケアは7,336名（29.7%）に実施されていた。直近1年間のGEによる副反応は、気分不快・冷汗・顔面蒼白が31件、徐脈・血圧低下が22件、意識消失が6件、血尿が2件であった。

回答されたGEや摘便を実施する利用者1,161名のうち成人の利用者1,129名のデータを分析対象とした。利用者（77.9±15.7歳）の直近1週間の定期訪問看護回数は2.7±2.0回（うち排便ケア目的2.0±1.3回）であり、直近1回の直接訪問看護所要時間は58.0±17.5分（うち排便ケア28.2±15.3分）であり、実施された排便ケアは、摘便863名（76.4%）、腹部マッサージ791名（70.1%）、GEが742名（65.7%）、下剤の使用の把握・投与・調整・指導669名（59.3%）、生活指導（食事・水分・運動等）663名（58.7%）、摘便時の腹部圧迫621名（55.0%）、肛門や直腸内刺激391名（34.6%）、温罨法164名（14.5%）、トイレ誘導141名（12.5%）、坐薬95名（8.4%）であった。GEと摘便の組み合わせでは、両方実施574名（50.8%）、摘便のみ289名（25.6%）、GEのみ168名（14.9%）であった。

### 4. 考察

先行研究ではGEと摘便の併用がGEによる溶血等の危険性を高めると指摘されるが、GEと摘便の併用は50.8%であり、血尿も発生していたことから、GEによる溶血を回避できる安全な排便ケアの提供が急務である。GEや摘便が必要な排便機能低下者には、30分程かけ、複数のケアを組み合わせて排便を促す必要もあるため、GEによる溶血を回避できる安全で適切な排便ケアの提供方法を示すケアマニュアルを確立し、普及する必要性が示唆された。

本研究は、2023年看保連研究助成金ならびに日本看護技術学会の支援を受け、データ収集には訪問看護財団の協力を得て実施した。